

日本イギリス哲学会関東部会 第97回研究例会

日時 2016年7月16日(土) 14:00~17:15

場所 慶應義塾大学三田キャンパス 研究室棟地下1階 第1会議室

プログラム

14:00~15:30

ヒュームとリードの正義論をめぐる一考察

国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科博士後期課程

小畑 敦嗣

15:45~17:15

「助言者」としてのホップズ

—同代人の『リヴァイアサン』批判を通して—

早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程

上田 悠久

関東部会担当 伊藤誠一郎 (seiichiro*mtj.biglobe.ne.jp)

矢嶋直規 (yajima*icu.ac.jp)

(*を"@に直して下さい。)

【報告要旨】

ヒュームとリードの正義論をめぐる一考察

小畑敦嗣（こはた あつし）

18 世紀スコットランドの道徳哲学の正義論は、規範的な規則について論じることで近代自然法学を継承すると共に、そのような規則を遵守する人物の性格特性も議論の対象としていた。そしてこのいずれにおいても重要性を有していた主題が、正義に伴う道徳的価値の根拠や動機づけ理由であったと考えられる。こうした観点から、本発表では同世代のスコットランド人哲学者であるデイヴィッド・ヒュームとトマス・リードに焦点をあて、この主題をめぐる両者の見解を考察していく。

ヒュームは『人間本性論』（1739-40 年）第三巻の道徳論において、規則としての正義の起源と発生、そしてこの規則を遵守する性格や動機に対する道徳的是認の根拠を論じている。ヒュームはまず規則としての正義を「他者の所持に手を出さないこと」にかかわる社会的コンヴェンションに由来するとし、その保護対象を所有権に限定している。そしてヒュームは性格特性としての正義を上述の規則を前提とする人為的な徳とみなした上で、快適性（*dulce*）と有用性（*utile*）による徳一般の定義づけに従い、この性格が徳とみなされる根拠をその有用性に求めている。上述した正義論の根幹には、ヒューム自身が確立した共感の原理である。

他方リードは『人間の活動力論』（1788 年）の道徳論において、ヒュームの議論に対する批判を展開している。リードは規則としての正義が保護すべき自然権を論じる上で社会的コンヴェンションを前提とせず、その内容も所有権に限定しない。またリードは性格特性としての正義の人為性を否定し、その評価の基礎を有用性ではなくストア主義的な立派さ（*honestum*）に求めている。この正義論の根幹には、イングランド主教ジョセフ・バトラーから継承した良心論がある。

以上のように、18 世紀スコットランドという土壌が生み出したヒュームとリードの正義論は、明確なコントラストを成している。本発表では、両者の立場の相違について考察を深めながら、その思想史的意義を明らかにしていきたい。

「助言者」としてのホッブズ
—同時代人の『リヴァイアサン』批判を通して—

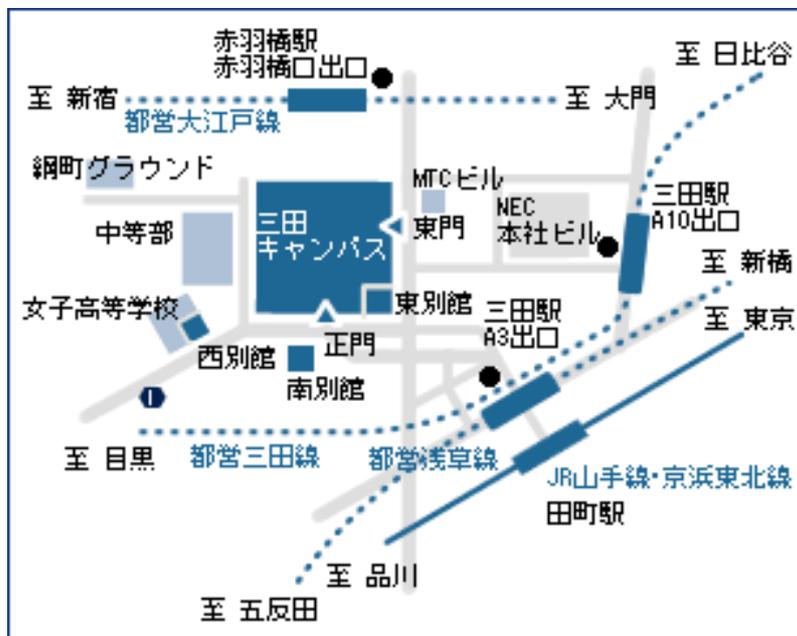
上田悠久（うえだ はるひさ）

トマス・ホッブズの『リヴァイアサン』第25章「助言（counsell）について」の意義にかんしては現在評価が定まっていない。当時の議会主権論者を念頭に書かれているという指摘もあるが、報告者はホッブズの狙いはさらにあると考える。

本報告ではホッブズの「助言」に関する議論の背景を探るべく、『リヴァイアサン』の執筆後にホッブズを批判した王党派で、今日では制限君主政、法の支配などを擁護する立憲王党主義（constitutional royalism）の代表的人物ともみなされる、クラレンドン伯エドワード・ハイドと司教ジョン・ブラモールの論考に注目する。彼らは王を中心とする立憲政治体制にとり有害であるホッブズを排除するため、ホッブズの助言論を「クロムウェルの助言者」になろうとする為の議論だとして批判した。学知（science）を備えた助言者の必要性を説き、また政治にかんする学知の発見を自負するホッブズには「助言者」になる資格など無いことを、彼らは政治と経験や歴史を結び付ける伝統的な政治観に訴えることで批判するのである。こうした二人の指摘はホッブズの政治的意図を知る手がかりであるばかりか、イングランドにおける支配的な「助言者」像を我々に提示している。

しかしホッブズ本人は、彼らを含めた既存のあらゆる「助言者」を批判していたのである。ホッブズは後年『ビヒモス』において、王の助言者を標榜する議会、宮廷内の王党派双方に対する批判を展開するが、本報告ではこうした姿勢が既に『リヴァイアサン』の助言論において示されていることを指摘する。既存の「助言者」が助言者として不適格であるとして、ホッブズは彼らが有する既存の「助言者」像を学知の導入によって変革しようとした。ただし彼は経験や思慮が求められる伝統的な政治観を学知によって塗り替えるのではなく、政治における学知と経験の両立を読者に進言する。ホッブズの『リヴァイアサン』は、イングランド政治に携わるあらゆる党派に向けて書かれた、特定の名宛人を持たない助言書なのである。

【会場案内】



108-8345 東京都港区三田 2-15-45

JR 山手線・京浜東北線 田町駅下車、徒歩 8 分

都営地下鉄浅草線・三田線 三田駅下車、徒歩 7 分

都営地下鉄大江戸線 赤羽橋下車、徒歩 8 分



研究室棟は⑩の建物です